

アメリカにおける教員の質：
政策・改革・対応の物語

ドナ・ワイズマン
メリーランド大学教育学部長

はじめに

日本に戻ってこれることができて本当にうれしいです。夫がアメリカの大学の日本分校（郡山と秋田）に勤めていたころ、私も多くの時を過ごした場所、それが日本なのです。日本で過ごす中で、日本の民芸の考え方を知りました。それは、ふつうの人々の手仕事のことです。民芸の思想は、日常のごくありふれた実用的なモノの中に美と工芸を発見するよう私たちを促します。民芸の思想は、自らの生き方や日本に住むことで私が得たかけがえのないものについて考える格好の方法です。

玩具は民芸の思想では普通の実用的なモノと考えられており、日本にいる間に私は日本の人形にまつわる言い伝えに魅了されました。こけし、御所人形、ひな人形、木目込み人形ほか、多くの人形は日本の民俗文化や特定の場所を表しています。そうした人形のひとつ、「ほうこうさん」は四国の民話の登場人物です。その話は次のようなものです。

昔、高松におまきという少女が住んでいました。家はとても貧しかったので、侍の家に奉公に出されました。奉公先では娘に仕えましたが、その娘は不治の病に侵されていきました。おまきは、この小さな主人を昼も夜も看病しましたので、病がおまきの体に移りました。おまきは、やさしく、忠実であったので、ほかの人に病気が移らないよう、はるかかなたの島へひとりで船を漕いで出ていきました。おまきを再び見た人は誰もいませんでした。

以来、讃岐の村では、子どもが病気にかかると、子どもの病気が早く治るように「ほうこうさん」（奉公さん）と呼ばれる人形を一晩病気の子供の布団に入れて、翌朝、海へ流すことが行われています。今では、おまきにあやかって「ほうこうさん」と名付けられた人形は病除けのお守りとして、花嫁道具の一つとなっています。

こうした個人的な話をするのは、私が日本の文化からどれだけ多くのことを学んだか、今日、こうして日本の皆様方の前でお話をするのを私がどれだ

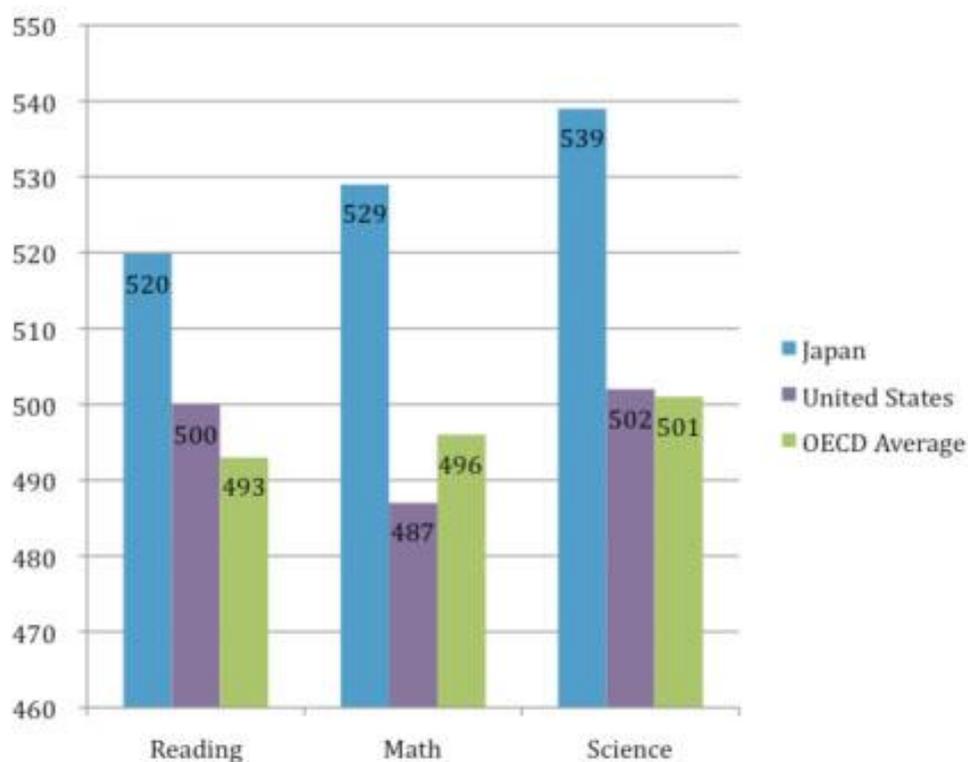
け光栄に思っているか、そして、この会議に出席している方々すべてから学ぶことを私が楽しみに思っているかをわかっていただけたらと思ったからです。

私たちは、質の高い教師、すなわち、今日の教室で成長を続ける教師、次の世代がローカルにグローバルに主要な役割をどう果たすかを理解している責任ある市民として育つのを助ける教師を養成するという課題について話し合うため、美しい鳴門にこうして集まりました。日本であろうと、アメリカ、西アフリカであろうと、教師のパフォーマンスと効果は改善しなければならないという主張がなされています（OECD, 2009）。教師は教育スタンダードを向上するためには決定的に重要であること、また教師の質が生徒の学習にインパクトを及ぼすことを示す証拠は広く知れ渡っていて、このことはほかの教育投資の影を薄くしてしまいます。教師の質を強調することは、教師を養成し、現職教育を提供する人々に対してその職務の重要性を強調することにほかなりません。すべての教師が高い力量と最善の職務遂行をする意欲・やる気を持つことを保証するように教師を養成し、現職教育を提供しなければならないからです。教員養成に携わる我々にとって、これほど高い期待を寄せられたことはかつてありませんでした（Goldhaber, 2009; Gordon, Kane, & Staiger, 2006; Dariling-Hammond, 2010）。こうした期待にどう応えるのかは、アメリカでも日本でも重要な問題です。今日は、ここにお集まりのみなさんが我々の経験から学ばれることを期待して、アメリカの教員養成が直面する課題とそれに対して我々がどのように応えようとしているかをお話することにします。

教員養成の需要

アメリカでは初等・中等教育段階の生徒の教育、学業成績の危機に直面している。彼らが将来の課題への備えが十分にできていないことを示す証拠がある。主要な先進国の15歳の子供を対象としたPISAのデータでは、アメリカの生徒は特に数学と理科の分野で期待されたレベルにはないことを示している。日米の生徒の学力データを比較すると、アメリカの生徒は日本の生徒に読解、理科、数学でかなり水をあけられている。さらに、国内においても、低所得地域と高所得地域出身の生徒のように、多様な生徒集団の間に大きな学力差が見られる。たとえば、貧困で育った生徒では24歳までに大学を卒業する者の割合は8%にしかすぎないが、それに対してより恵まれた地域出身の生徒ではその割合は80%に上る。将来の職業についてはもちろんのこと、今日の職業で必要とされるスキルや能力を備えて労働市場に参入することがますますできなくなっている。こうした問題等は現在の教育システムの見直し、国として将来の教師をどのように養成しているのかを再点検する結果となった。

図表 1: PISA 2009 国別平均点(Source: OECD)



国民の教育システムへの信頼もまた減少している。“スーパーマンを待ちわびて：いかにしてアメリカの公立学校を救うことができるか”（*Waiting for Superman: How We Can Save America’s Public Schools*）（2010）というドキュメンタリー映画を国民が受け入れたことがその事実を証明している。この映画は、よい学校を見つけ、優れた授業を経験しようともがく生徒たちの胸を打つ実例を描いたものであるが、市民の大きな関心呼んだ。映画では公立学校の教室や教師はあまり肯定的に描写されているとは言えないが、革新的なチャータースクールや、非伝統的な大学外のプログラムで養成された教師を宣伝したことは、アメリカの学校への劇的な警鐘の役割を果たした。同時に、教師の質と養成に国民の話題を集めた。この映画は、教育や教員養成をめぐる市民の対話や議論に含まれる批判的な意味合いをとらえたのである。

政治的にも多様な立場にある行政官、政治家、慈善家、メディア、シンクタンクの論点は、一貫して、教師の質は向上しなければならない、というものである。質の高い教師は、教育スタンダードを向上させ、すべての生徒の学習を改善するうえで決定的な要因であることを裏付ける研究成果が、その主張を強固なものにしている。学校教育の効率性と公正さは、教室に効果の高い教師を

配置することにかかっていると多くの方が明言し、教員養成を議論の焦点にしている。我が国の教育問題は教員養成と現職教育に直接関係がある、と感じている人たちが多数いる。残念ながら、われわれ教員養成に携わる者の最大の問題の一つは、そうした批判に応えるための、説得力のあるロードマップを持っていないということにある。

質の高い教師が初等・中等学校の生徒の教育経験を改善するであろうことは、ほとんどすべての人が同意する。では、そのように教師を育てるためのプログラムとはどんなものか、十分に訓練を受け、高度な資格を認定された教師の成果をどう測るのかについては、なかなか同意が得られない。質の高い教員養成プログラムについての疑問は山のようにある。長期のプログラムの方が短期プログラムよりも優れているのか。学校に基礎をおく、現場の教師に依存するプログラムは、キャンパス中心の養成プログラムよりも優れているのか。教科内容にフォーカスするプログラムは、社会文化的理論や適切な教授法の基盤の上に構築されたものよりも優れているのか。どのようなモードの教授法が教えられるべきなのか。どのような学級経営のモデルが確かなのか。我々は将来の教師を訓練するのか、教育するのか。将来教師になろうとする学生が養成プログラムから carry away する個人的な資質を形作ることができるのか。

研究成果に裏打ちされ、確信をもって答えることができない疑問が数多くある。権威ある米国学術会議が行った最近の研究は、教師を養成するどの方法も効果があることを裏付ける研究証拠がほとんどない、と結論付けている (National Research Council, 2010)。現在の教員養成、教職改革のモデルでは、大学だけが問題を解決しようとやっきになっているわけではない。実は、篤志家、起業家、ビジネスリーダー、保守的政治家、リベラルなメディアの関心、オバマ政権、さらに Teach for America、the New Teacher Project、Chiefs for Change and Education Trust のそれぞれがアメリカ国内で教師教育改革を課題として推進しようとしている。

こうした理由から、アメリカでは、教員養成の本質ならびに教師の質が激しい議論の根底にはある。どの議論もそうだが、二つの対抗勢力がある。一方には「伝統派」(traditionalists)と呼ばれる人々があり、伝統的な大学に基礎を置く教員養成と、しっかりした臨床経験を擁護する。他方、「改革派」と呼ばれる人たちは、資格証明書よりもパフォーマンスを重視し、従来免許制や養成方法に懐疑的である。

両派ともに、彼らの道具を用いてプログラムの有効性を測り、卒業生の成果

を強調して、自らの思い描くイメージに合わせて教師教育を作り直そうとしている。両陣営はその方法がかなり異なっているのだが、彼らが教育議論に登場することで、生徒の学業成績を高めようとする努力の一環として、教師教育プログラムの質を引き上げることへの関心と呼び覚ました。議論は多方面に及び、連邦、州レベルの教育政策、教育団体内でのスタンダード開発、非アカデミックな非営利組織の台頭、大学でのプログラムデザイン、プログラム実施まで、すべてに影響を及ぼしている。そうした動きのいくつかを紹介する前に、アメリカの教育制度の文脈の中で、伝統派と改革派の見解を比較して示すことが重要である。

伝統派對改革派

現在のところ、改革派の人たちは、より多くの権限を州に与える、教員養成プログラムの間により整合性を確保する、プログラムの卒業生が実践でどれくらい有効かを評価し、そうした成果を養成プログラムの有効性で説明するよう主張する。彼らの行動アジェンダには、次のようなものが含まれる。スタンダード設定、アラインメント、アカウントビリティ、データに基づいた意思決定、教員のパフォーマンス評価、**Value added** あるいは学力の伸びで生徒を評価すること、学校現場で臨床的に養成すること、現代のテクノロジーの活用、新規教員のプロバイダー間での競争。改革派は、有効性を定義することを要求する。多様な標準化されたアセスメントで測定される生徒の学力得点を向上させるとはどういうことか。(ドロップアウトしないで) 学校にとどまり、真剣に取り組むこと、上級学校や大学へのレディネスも重要な指標だが、地方教育委員会が実施するテストでの生徒の成績が第一だと論じる。

それに対して、伝統派の主張は、すべての学習者は競争が激しく、変化の激しいグローバルな社会にあって成功するためのスキルと知識を獲得しなければならない、教師教育はそうした要求を受け入れるためには「延長される」必要がある、というものです。伝統派は、高度に技術化し、メディアの優勢な社会は新しい精緻な (*sophisticated* な) 戦略を持つので、そうした社会で多様な学習者を教えるのにより力量のある教師を養成するためには、リソースを追加する必要のあるモデルを主張しています (Darling-Hammond & Mclaughlin, 1999)。彼らは、新しい養成形態、より多くの教科内容の習得、より長期間で労働集約的なモデルに傾いている。それは学校現場で臨床的に養成し、インターンシップ、インダクションプログラム、教師のレジデンシーモデルに依存するものである。5年、6年、さらには7年もの養成期間とインダクションプログラムを想定しているが、これは大学の養成プログラムと学校に基礎を置くプロフェッショナル

ル・ディベロップメントの関係を一新し、養成から実践へと継ぎ目のない移行を作り出そうとする。改革派が、従来のやり方ではない教員養成プログラムを支持しているのと違い、伝統派の人たちは短期間あるいは短縮した教員養成プログラムでは質の高い教員を養成することはできない、期間を延長し、臨床的な養成プログラムによってこそそれが可能だという。

議論に流れる一貫したテーマは、どうやって質の高い教員と認定し測定するのか、どうやって教師教育プログラムを教員養成に説明責任を持たせるか、というものである。**Race to the Top**や他の州や連邦の政策は、教職に携わる人々が、教師のパフォーマンスと生徒の学習とを結びつけることによって教師教育プログラムを測定する方法を見つけること要求している。**Value added** 法という教師の有効性を測る方法は、伝統派と改革派が意見の一致をみないもう一つの領域である。

Value added モデルは複雑な数学を用いて、いくつかの特性、たとえば生徒の出席率や過去のテストでの成績などに基づいて生徒の学年末の成績を予測する。標準化された算数や英語（国語）のテストをうける生徒を持つ教師は、そのテストでの生徒の成績に対して説明責任を持たされる。もし、ある教師の受け持つ生徒たちが、平均して、予測されたテスト得点を下回っている場合、その教師は教育効果の低い(**ineffective**)教師というレッテルをはられるのに対し、もし、予測通り、あるいはそれ以上であれば、その教師は効果のある(**effective**)、あるいは非常に効果のある(**highly effective**)教師と呼ばれるのである。

全国ではいくつかの州や学区がすでに標準化テストでの生徒の成績を教師の評価と連動させている。ほかにも導入を考えているところがある。改革派の多くは、オバマ政権にいる者も含めて、このやり方を支持している。しかし、教員組合、研究者、伝統派を含む懐疑派は、**value-added** モデルは信頼性に問題があり、教室でのパフォーマンスに影響を与える複数の要因を考慮していない、と反論する。教師のパフォーマンスと生徒の成績を結びつけるこの方法は、教師の質に関するアメリカでの議論の主要部分であり続けるし、教員養成に携わる人々や研究者の努力やリソースの多くを必要とする議論である。

教育政策へのインパクト

では、伝統派と改革派の間のこうしたレトリックは現在の教育政策にどのようなインパクトをもたらしたのだろうか。大学に基礎を置く教師教育の価値を疑問視する動きはアメリカ連邦政策にみられる。2001年に成立した**No Child Left Behind(NCLB)**と、教育効果のきわめて高い教師をどう定義するかという **NCLB**

の取組は、教師教育の説明責任の議論を活発化させた (Crowe, 2010)。NCLB は今日の、そして将来の教師の教科内容の準備に焦点を合わせて高い資格を持つ教師を定義しようとした。教科内容強化の重要性を主張し、教員養成に異議を唱えて、慈善家の代表的な人物 (ビル・ゲイツ) は教員免許は教師の質を保証しないと述べた。

最近では、教育の変革、改革の切り札としてオバマ政権は **Race to the Top Initiative (RTTT)**を提案した。初・中等教育に焦点を合わせているとはいえ、RTTT は教育改革の喫緊の課題の一つとして教師の質の向上を挙げた。RTTT は NCLB にみられる教科内容重視を引き継ぐものであるが、RTTT の教員養成のコンポーネントは生徒の成績をその教師の養成プログラムと結びつけるよう求めており、正規の教師教育プログラム後の教室でのパフォーマンスだけが重要であると示唆している。

こうした連邦の取り組みは、内容に強くかつ短期間に養成する方法を擁護する政策を支持するものであり、教員免許への代替ルート、高等教育や営利、非営利の場での速成養成へ道を開くものであった。そうしたプログラムの一例が **Teach for America (TFA)**で、これは大学を卒業して間のない成績優秀な学生に協力を求めて、低所得のコミュニティで 2 年以上教えるというものである。改革派から革新的で効果的と称賛され、TFA にリクルートされた者は 2 か月の夏季集中プログラムで養成され、アメリカ中の都市部や農村部の学校へ配置される。TFA の教師は 2 年が終わったら教職を離れることが多いにも関わらず、TFA は、しばしば、伝統的な方法 (教員養成学部) で養成された教師と教職ポストをめぐって競争する。連邦、州の政策や補助金交付のプロセスは、TEF に好意的なことが多く、多くの財団や企業の献金でプログラムは非常な成功を収めている。TFA は効果的なマーケティングプログラムを有しており、大学キャンパスで学生の募集に成果を上げている。そればかりか、伝統的な教師教育プログラムからも学生を募集する。

TFA は、改革派の意図がアメリカ以外の国にも波及する可能性があることを示す具体的な事例である。2012 年 4 月、TEF は **Teach for Japan** をもつとも新しいパートナーとして独立組織のグローバルなネットワーク迎え入れた。**Teach for Japan (TFJ)** は同様のモデルにのっとり、伝統的に教育者として養成教育を受けていない優秀な学生を募集し、訓練する。この新しい教師の“種族”が、日本で教育制度にどのような影響を与えるか。それに対する対応は？このモデルは持続可能か、あるいはこれまでの伝統的な教員養成プログラムよりも優れたものか。この場におられる日本の同僚は、われわれが格闘しているのと同じ問題に

直面するかもしれない。

改革派と伝統派の間のイデオロギーの違いは、オバマ政権が教師教育プログラムについて新しい連邦規則を制定しようとする試みに端的に表れる。2012年春、連邦教育省は伝統派、改革派双方から集めた17人の代表からなるパネルを招集し、質の高い教員養成を特定し、質の高い教員養成と質の低い教員養成を識別する新しい基準を提案するように求めた。

6か月にわたるパネルの取り組みは、成果よりもフラストレーションをもたらした。伝統派、改革派は、予想通り、教職についたばかりの教師の教室でのパフォーマンスを評価するための評価基準の妥当性、信頼性に関する事柄で、意見が分かれた。激しい議論の応酬の末、パネルはなんら決定をせずに終わり、結末を連邦政府の手にゆだねたことは、“地方主導”、分権的意思決定として知られる我が国の政治制度に懸念を引き起こした。教師教育に関する連邦としての政策を具体的なものにすることがオバマ政権の最優先課題になった。

解決策の提案：教員養成の対応

政治的なレトリック、国民の要望、長引く論争の真ただ中で、教師教育の職にある者たちは、大学に基礎を置く教員養成プログラムの強化と、質の高い教員養成プログラムを求める要望に応えるため、一連の行動を起こした。取組は、強力な臨床的実践の条件の概要を説明し、教職のスタンダードを設定し、将来の教師となる学生が養成プログラム中にどのように成長したかを評価するシステムを設定することに関係するものであった。

まず、臨床的実践へ新たに重点的に取り組むことになった。およそ2年半前、全米教師教育認定協議会（NCATE）は「生徒の学力向上のための臨床的養成とパートナーシップに関する有識者会議」を任命した。私自身も会議のメンバーだったが、その目的はNCATEと教師教育関係者に対して、教員養成にどのような変革を行うべきかについてガイダンスを与えることであった。最終的に、有識者会議の目標は教員養成を再設計するうえで重要な枠組みを確定することであった。NCATEのこうしたリーダーシップは、教師の養成方法と学校が必要とするものの間にギャップがあること、教師教育を改革する方法は、強力な実践経験に基づいたプログラムを確立することである、という確固とした信念に導かれてのことである。

その結果もたらされた報告書（NCATE,2010）は、臨床的実践経験に基礎を置

く優れたプログラムの例を提示したが、個別の試みでは十分ではなく、教師の質を向上させるためには教員養成はまったく新しいシステムを必要としている、との結論に達した。有識者会議の基本的前提は、教師教育プログラムは学校と密接なパートナーシップを持って取り組むべきであること、実践を養成経験の中核に位置づけること、というものであった。報告書は行動の呼びかけを公にし（図 2）、新しく教員養成プログラムを設計するための原則—もし実践されれば教師の教育を根底からひっくり返すもの（p2）—を示した。

（図表 2 挿入）

私の地元であるメリーランド州では、これから教師になろうとする者はすべてプロフェッショナル・ディベロップメント・スクール（Professional Development School、PDS）で養成される。PDS は、教員養成、現職教員研修の計画、教員養成カリキュラムの改善、教員養成、教室での授業実践を改善する共同研究プロジェクトの開発を行うことに正式に合意した臨床現場（学校）である。図 3 は学校とメリーランド大学教育学部のパートナーシップの複雑性（もっとも効果的な例であるが）を図示したものである。パートナーシップの目標はコミュニケーション、協働、職能成長を中核とする学習コミュニティを作ることである。学校と大学それぞれの教員からなるいくつかの監督委員会が活動を監督している。教員養成学部の学生が毎日の学校活動を参観し、活動に参加する、授業を計画し、実践する、生徒の学習を評価する、というすべての養成段階において、すべての教科領域の指導教員（大学）と PDS の教員がともに養成学部学生を指導する。PDS での養成期間中、実習生は学校の一員であり、職員会議、部会議に参加し、PDS の現職教員を対象にした研修に参加する。

（図表 3 挿入）

教員養成の専門職団体がとった第二のイニシアチブは、教員養成プログラムの認証と厳格なスタンダードの設定である。2011 年、教員養成の 2 つの認証団体である NCATE と TEAC（Teacher Education Accreditation Council）の統合が本決まりとなり、CAEP（Council for Accreditation of Educator Preparation）として出発することになった。統合は、より高い成果を上げている、質の高い教員養成プログラムに共通した明確な特徴を定義するという絶好の機会を提供してくれる。新しい団体の意図は、新しくスタンダード開発することであり、証拠に基づいた（evidence-based）実例とともに提示して、スタンダードが統一した方法で使用されることを目指している。現在、アメリカの指導的な教育者からなる委員会が、伝統的なプログラム、代替ルートによるプログラムの双方を導くスタンダード（研究に根差したもの）を開発すべく作業中である。委員会は 5 つの領域のス

スタンダードを鋭意開発中である。

(図表 4 挿入)

この委員会のメンバーの一人として、私は教師志望者の質・精選に関するスタンダードを考える小委員会に属している。先日、小委員会は2日間の会議で、より資格のある学生を募集し、養成し、養成プログラムにとどまるような結果をもたらすスタンダードをどうやって開発するかを討議した。議論は、養成プログラムに入学を許可される前に持つべき資格と、養成プログラムで身につけるべきスキル、能力が中心であった。また、質の高い教員養成のインパクトを説明できるように、データ収集が重要だということも話し合った。我々の小委員会で特に時間を費やして議論したのは次の3つの点である。

1. 国内の多様な教員養成学部を対象に、スタンダードをどのように表現するか。
2. テクノロジーで豊かになり、メディアによって支えられている環境に対応できる教師—今日の教師に必要なスキルとは非常に異なったスキルを必要とすることが考えられる—を養成していることを、スタンダードはどう認めるのか。
3. 将来の教師すべてに必要とされる基本的体験、資質とは何なのか。

新スタンダードと教員養成プログラムを精査するプロセスが、プログラムの質の向上と教員養成の真価を認めさせ、支持を確保する基盤になることが期待される。より規範的なスタンダード、知識を獲得するうえで具体的な特徴を強調したこと、現場で教えることを学び、実習すること、これらは水準を引き上げ、教師教育の提供者に新たな挑戦を突きつける。

最後に、われわれへの批判者に答えるため、将来教師となる者を評価する方法を開発し、実施することに教師教育者全体として取り組んでいる。その方法は、教員養成プログラムの有効性を示す証拠を提供し、プログラムの改善をサポートし、生徒の学習との関連で教育の質についての情報を政策立案者に提供するものである。アメリカの教員養成は、さまざまな方法に依拠して教師候補者の評価を行ってきた。標準化された入学テスト、コースでの評価から教室で実習する様子の観察、気質やレディネスの技術的な評価など。近年は、生徒のポートフォリオが実習生の行ったことを記録保存することを可能にし、指導教員には実習生の進歩を評価する方法を提供するものとして有力になってきた。アメリカでは、多くの州で、教員免許交付の適切性を判断するために、出口試験が用いられている。こうした方法の不十分さ、そうした方法ではその後教師に

なった時の有効性を予測することができないことから、教師の力量を評価する新しい方法を模索することになった。

全米教員養成大学協議会(American Association of Colleges for Teacher Education, AACTE)とスタンフォード大学とが共同して教員パフォーマンス評価(Teacher Performance Assessment: TPA)を開発した。25州 140以上の教員養成プログラムが関わる新しい取り組みである(図5)。TPAは授業実践に関するエビデンスを集めて、授業力と教員養成を改善するための評価ツールである。このパフォーマンス評価では、教員志望者は、単元の計画案や授業の実際を記録し、自分の授業をビデオに撮り、分析し、生徒の学びの証拠を収集し、評価することが求められる。高度な訓練を受けた評価者によって、これら一つ一つのものを集めて整理し、効果的授業実践のスタンダードを反映する具体的で明確な基準に照らして一貫した方法で評価される。こうした評価は新任教員のパフォーマンスを測定し、実践力向上に役立てるために使うことができることがわかっている。

私の所属する大学でもTPAを実施しているが、TPAによって課題に対する学生の回答が劇的に変化していることを見出している。TPAは教室と直接結びつけるように学生のリフレクションや学びを導いてくれる。TPAは、メリーランド大学教員養成プログラムに在籍する教員志望者の次のような能力を対象としている。

(図表5挿入)

生徒の事例研究、生徒の学びの分析、カリキュラム/授業の分析がTPA評価の特徴である。カリキュラム/授業分析の一例を見ると、このアセスメント・プロセスが教員志望者の教室でのリフレクションに大きな効果を上げていることがわかる。図6の非常に短い例からもわかるように、TPAにしたがってカリキュラム/授業分析を行った場合、教員志望の学生は自分たちの振る舞いをじっくりと考え、生徒の反応をもっと予測している。(TPAについては、この後の事例発表で詳しく聞くことができる。)

(図表6挿入)

こうしたアセスメントシステムが非常に複雑であり、ファカルティ・ディベロップメント(FD)、学生のトレーニング、教員養成へより多くのリソースをあてがう必要があるという事実にも関わらず、TPAは教員養成プログラムの価値を立証し、養成学部生の将来の成功を予測し、教員養成プログラムで効果があるものは何かを理解するのに役立つ可能性を持っている。こうした努力は、ア

アメリカで教職が直面する否定的な教職イメージを解消はしないが、それぞれの試みがアメリカの子どもたちの学力成果の向上には決定的に重要である。教育学部長として、私は、こうした三つの試みは教員養成の方法改善を促進すると楽観視している。

と同時に、アメリカで教職、教員養成職が直面する問題を過小評価してはならない。現在、教師教育界は教えることをめぐってまったく異なった考えで二分されている。伝統派は専門的職業を築こうとしているのに対し、改革派は、非常に有能で、結果に対して説明責任を持つ公共労働者を求めている。改革派の努力は政策、政府のあらゆるレベルで成功しつつある。伝統派は論議をリードするよりも守勢に回っている。現在の大統領選挙キャンペーンにおいても、両候補が教育や教員養成を話題にするときには、より改革派の視点に立っている。教育制度はどうあるべきかについて、伝統派、改革派、どちらの枠組に立つにせよ、変革が必要であるという点では意見の一致をみている。どんな変革が必要かという点に関して合意をするためには、両陣営は何とかして歩み寄って、われわれの子どもたちを教育するという共通の目的に立って信頼を築かなければならない。残念ながら、両陣営は協働するには程遠く、ここ当分は、教職、教師教育を取り巻く対立状況は教育政策、教育改革の最前線にとどまるであろう。両者の分裂は潜在的な可能性として残り、分裂のインパクトは過小評価すべきではない。

結語

アメリカにおける質の高い教育と教員養成を定義しようとするわれわれの探求の物語は複雑で、時として紛らわしく、往々にして議論を引き起こすものである。が、われわれの最大の希望は、日々の努力と教員養成プログラムに在籍する学生からもたらされる。教員養成学部外での議論は否定的な傾向があるかもしれないが、高等教育機関の廊下や教室で交わされる議論はそれとは異なっている。教員養成の学部や大学院に在籍する学生の力量、献身、エネルギーには目を見張るものがある。どの学生集団も期待に満ち、我が国の青少年を教育するという課題に全力で取り組むレディネスを持っている。彼らは理想主義者か。もちろん、理想主義者だし、彼らが教職に前向きなエネルギーを持ち込むことを必要としている。彼らはすべての子どもたちを教えるためのもっともよい方法を学びたいと願っているし、すべての生徒が学校教育から恩恵を受けるように、学校で同僚と協働し、パートナーを組むうえで最も効果的な方法を学びたがっている。教育学部長（そして企業のリーダー）は、大学に基礎を置く教員養成に未来はあるのかと懸念している反面、次世代の教師たちは大学での

教育に喜んで参加し、リスクの高い子どもたちのボランティア・チューター、優れた教師の実践観察、教育実習を行っている。

教員養成にかかわる課題が大きいことは疑うべくもない。今は、教職がますます説明責任を求められ、新しい改革派が優勢になって政策議論に影響を及ぼし、初中等、高等教育（特に教師教育）においてスタンダードを設定することが重要で、代替的な教員養成プログラムの提供者との競争、データ収集に自信を持ち、生徒の学習を教師の授業力に起因するとみなす、そういう時代なのである。教員養成大学はそうした批判に応えるよう要求されていることは間違いない。アメリカの教員養成界が一連の大胆な介入によってどうその批判に応えようとしたかを話してきた。しかし、教育、教師教育には引き続き難題が待ち受けており、われわれにはまだまだ多くの仕事が残っている。

国際的な会議で、アメリカの課題や実績を共有することがなぜ重要なのか。また、なぜここに集まった方々がアメリカの取り組みに関心を持つべきなのか。もちろん、もっとも単純な答えは、お互いから学び、経験や解決策を共有することによって重要な問題について理解を得ることができる、というものである。今日の世界では、移動やコミュニケーションが容易になったことから相互の距離が近くなっている。そのため、ある国で起こったことは他の国でも早晩起こることが予想されることから、共通する課題に答え、関連したテーマを検討するためには、お互いに協力することがますます大事になる。教えること、学ぶこと、教員養成に関する重要な課題について一緒に答えを出すことができれば、われわれは何倍も強力で影響力も大きくなるだろう。日米教員養成協議会（JUSTEC）のこれまでの活動の本質は、教員養成学部に対して、そこで行われている学業と実践を検討し、日米の研究者、教育者、実践者の間でネットワークを確立し共同研究プロジェクトを立ち上げることを奨励することにある。

複雑な今日の教育状況のなかで、効果的に課題に答えることができる教員の養成は、どの国にとっても重要である。教育に求められるものは絶えず変化しており、世界中の教員養成はそのカリキュラムやプログラムが妥当性を持ち、その時々々の要求に合致するように、絶えず再考を求められている。教員養成職にある私たちは、どのような教育経験が質の高い教員をつくるのかについて大いに議論が分かれるであろうことは想像できる。教員養成職の内外で、政策主導の決定がなされるであろう。国民や政治家の発言は続くであろう。今後、世界中で教員養成に携わる者は、情報に基づき、理路整然とそうした議論に参加できる用意ができていなければならないと断言して間違いない。それらの政策課

題や論点に対して、学術的な解決策を提供できるかどうかはわれわれ次第である。一致協力することによって、よりよい学術的な解決策をよりたやすく見つけることができるだろう。

図表2 NCATE 有識者会議による提言

<p>教員養成において初中等学校 生徒の学習に焦点</p> <p>臨床に基礎をおく教員養成のデザイン、 実施においては、生徒の学習こそが 中心である。</p>	<p>教師教育のすべての側面を通 じて臨床的養成を組み込む</p> <p>内容と教授法が養成教育を通じて、コー スワーク、実験室ベースの経験、学校に 埋め込まれた実践の中で臨床的経験と統 合される。</p>
<p>カリキュラム・インセンティブ や実習担当スタッフの見直し</p> <p>高等教育は、教師と実習校での指導教員 との2つのアサインメントをもつ実習担 当教員の役割を開発すべきである。 学校は、ベテラン教師が将来教師となる 学生とともに働くようなスタッフの新し いモデルを開発すべきである。</p>	<p>知識基盤の拡張 臨床的養成</p> <p>現在、何が臨床的養成なのかに関して知 識基盤が十分とは言えない。新しいモデ ルを支え、どのようなモデルがもっとも 有効かを決定できるよう、新たなリソー スを投入しなければならない。</p>

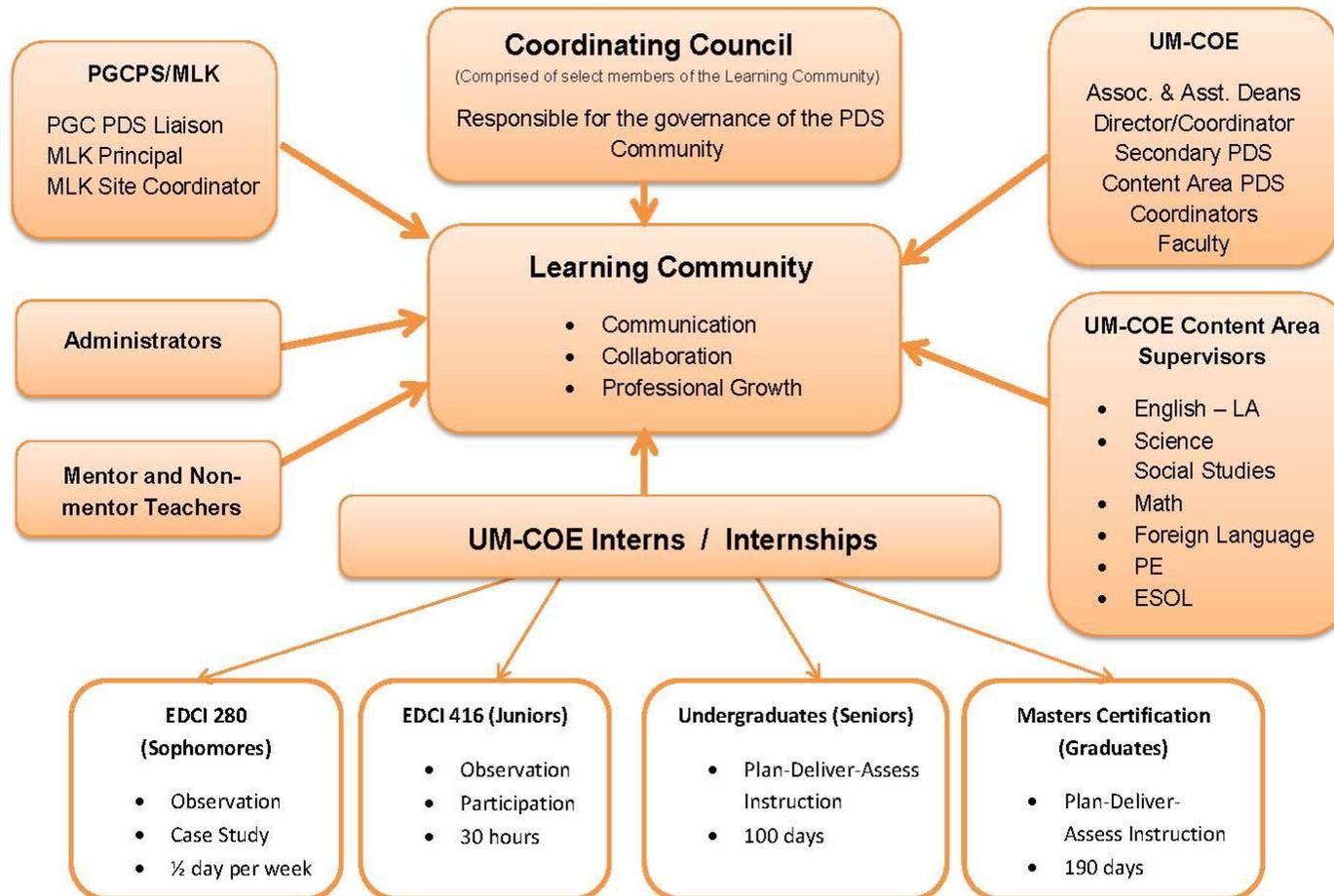
図表 3: 大学と地域学校パートナーシップ

Prince George's County Public School System (PGCPS)/Univ. of Maryland College of Education (UMCOE)

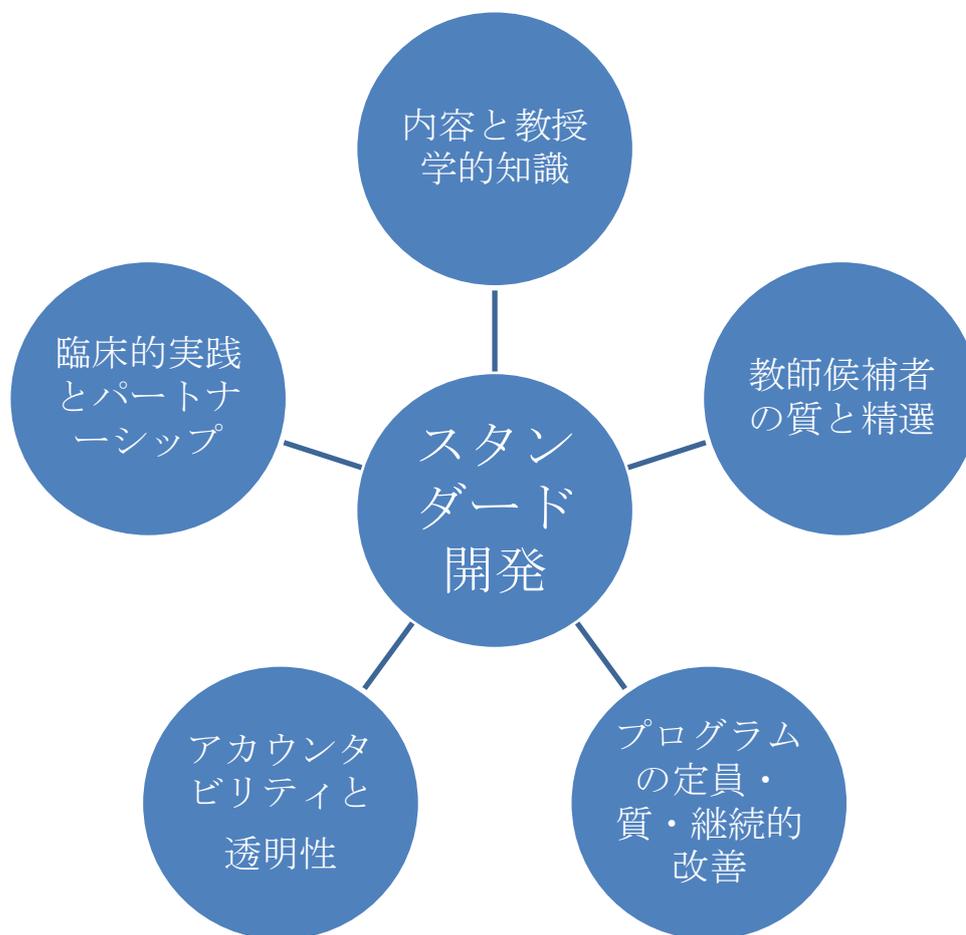
**Professional Development School Partnership at
Martin Luther King Jr. Middle School (MLK)**



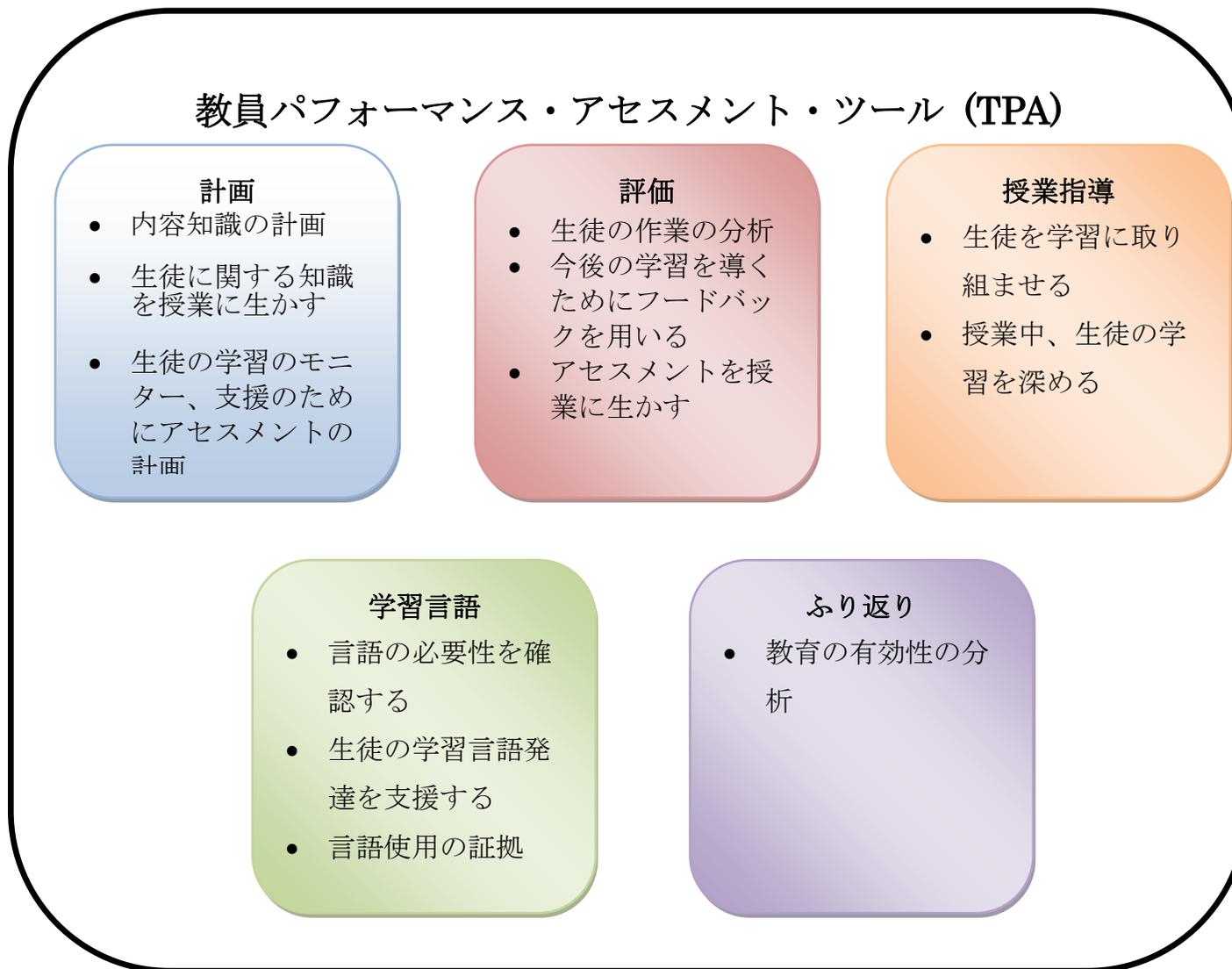
PDS Organization & Governance



図表 4: CAEP スタンダード開発



図表 5: AACTE とスタンフォード大学による教員パフォーマンスアセスメント



図表 6: TPA 前後の比較

TPA 採用前

教師の指導による読書活動 1年生

教師はカーペットに生徒を集めて、Cadance Fleming の "Muncha Muncha, Munca" の本を見せる。最初に、どんな物語かをみんなでブレインストーミングすると説明する。教師は本の表紙カバーを見せ、ランダムにページを選んで、生徒に見せる。生徒に、それぞれのページをよく観察し得、それぞれのページで何が起きているかを考えるようにいう。

TPA 採用後のアサインメント例

教師の指導による読書活動 1年生

みなさん！今日は、David Axtell の”ライオン狩りにでかけよう”を読みます。sw-, sq-, sp, -sh の文字が組み合わさった語を練習します。こうした音のコンビネーションを持った語を解説する方法を勉強します。それぞれの文字の組み合わせがどんな音を生むかを知っていたら、自分で語を見つけることができるようになりますね。物語を読む前に、読書日記に、さっと、スピードライティング活動をしましょう。黒板に文字の組み合わせを4種類書きます。なんでもいいので、その組み合わせのどれか1つを持つ語が浮かんだら、書いてほしいです。2分間で、できるだけたくさん、それぞれの組み合わせをもつ語を書いてください。そのあとで、みんなが思いついた単語を黒板に書いて確かめましょう。

備考：この本は、子どもにとって初めてなので、私が読む。そうすることで、ひとりで読むのがまだちょっと難しい Gisoo の支援になる。単語をグループで復唱することで生徒を参加させることができる、特に Kobi.

証拠：

計画

授業指導

評価

学習言語

振り返り